

小学1年生1学期の学習適応に必要な力-授業中の躓き場面から-

角谷 詩織(上越教育大学 大学院学校教育研究科 准教授)

1. 背景・目的

本研究では、小学1、2年生の授業における躓き場面の観察・分類を通して、小学1年生が1学期に授業で躓く場面の特性を明らかにしたい。そして、幼児教育と小学校教育との段差としてとらえられている概念を再考し、学習及び学校適応に必要な力や教育的配慮が何であるのかを明らかにしたい。以下のリサーチクエスチョンをたて、小学1年生が授業に躓いたり、流れに遅れをとる場面の背景にどのような要因が存在するのか、児童個人の要因、教師や課題特性といった環境要因に分けて明らかにする。

(1) 小学1年生が授業に躓くこと背景にある個人要因は何であるのか。:小学1年生1学期の学習において重要な力は、児童自身の興味関心をコントロールして、教師の話をはじめとする授業内容に関心を向ける力、多くの刺激の中から、自らが注意を向けるべき刺激を正確に選択し、課題に取り組む力であると考えられる。これらの力の不足が、授業に躓くこと背後にある個人的要因として存在するだろう。また、小学1年生1学期に学習する学習内容を知っているかどうかは、学習適応にあまり影響を与えないと考えられる。

(2) 小学1年生が授業に躓くこと背景にある環境要因は何であるのか。:児童が夢中になって取り組む授業には、学問の本質的な楽しさ・喜びを提供すること、言語的・自覚的学びの楽しさを実感させることが必要だろう。このような環境の提供を、小学1年生にとって困難な段差として捉えて避ける時、児童は授業に躓くだろう。

2. 研究方法

新潟県のA、B小学校の1年生118名(2クラス×2校)、2年生113名(2クラス×2校)の授業を観察した。1学期(4月~7月)は1年生を、2学期(9月~12月)は2年生の授業を観察した。フィールドノートによる記録のほか、ビデオカメラ1台を教室前方に設置した授業を録画した。

3. 結果・成果

教師の発問やフィードバックを、認知的側面、社会的側面に分類した。1年生の5月までは、社会的側面が強調され、6月以降は認知的側面が強調された。5月までは、小学校教育開始に伴う社会的な段差への実践的配慮が高いと捉えられた。

児童の躓く場面について、特定の児童が躓く場面と、大半の児童が躓く場面とに分類した。特定の児童が授業に躓く場面は、本人の自己調整する力、系統立てて数を数えるなどの基本的な数学的リテラシー、音読に必要な言語的リテラシーの不足といった個人的躓きとして観察された。一方、大半の児童が躓く場面は、授業での、身体的・感覚的学習の域を出ない活動、自由度の大きすぎる、認知的制約のない活動といった環境特性が共通に観察された。

多くの児童が意欲的に活動に取り組む実践場面も抽出できた。これらの場面に共通する特性として、適度な制約がある活動と、そこでの法則性の発見、学問の本質への自覚的気づきが観察された。

小学校入学に伴い、学校生活習慣上、不可避な段差が存在する。机や椅子に制約された行動範囲、発言方法や言葉遣い等への適応は、1年生の5月頃までは大きなチャレンジを伴う。これら社会的側面をできるだけ小さくするために、学校の制度や、生活科を中核としたカリキュラム等が綿密に組み込まれている。また、学級担任は、受容的な態度で子どもの不安を取り除き、自信を高めるような働きかけをし、これは、特に躓きやすい児童の不適応を予防する働きを持っていた。

一方で、認知的な段差は積極的に取り入れる必要があることも明らかとなった。認知的な段差とは、幼児期になされる身体的・感覚的学びから、小学校以降の学校教育の特徴である、言語的・自覚的学びへの段差である。1年生の授業の中で、認知的段差を少なくしようとして、身体的・感覚的活動を取り入れることは、子どもを短時間で活動に飽きさせ、授業への集中力を低めてしまう。言語的・自覚的学びの機会を提供し、感覚的には「知っていた」ことについての、法則性の発見を伴う自覚的な知、言語的な知といった、学問の本質に気づくような授業に出会うとき、1年生は、意欲的に活動に取り組む。

4. 今後の課題

データのより詳細な分析、統計的な根拠を提示したい。躓きやすい児童の様子について、場面を複数取り上げ、時期によるクラスメイトの反応の変化などを数量的に示したい。さらに、学問の本質に迫る授業を収集し、その特性をより詳細に論じたい。

共同研究者:井上 久祥(上越教育大学 大学院学校教育研究科)